

# 織田信長が築いた 小牧山城の石垣 其の2

会期：平成28年 9月16日(金)～11月16日(水)  
休館日：10月20日(木)



さんぞくせいしやうわん  
金属製小碗



てつすいしゆ  
鉄釉水注



すいてき ざるがた  
水滴(猿形)



しんがく せきぎやうせき  
輸入陶磁染付反皿

歴史館北東斜面で見つかった三段目の石垣  
(平成26年度発掘調査時撮影)

## ◆ごあいさつ◆

小牧市教育委員会では、史跡小牧山主郭地区の史跡整備を行う上での基礎資料を得るために、平成16年度から昨年度までに4次の試掘調査と8次の発掘調査を行ってきました。これまでの調査の成果から、永禄6年(1563)に織田信長が築いた小牧山城の姿が徐々に明らかになってきています。

平成25年度に「織田信長が築いた 小牧山城の石垣」と題して主郭地区におけるそれまでの調査成果を紹介しましたが、今回の企画展では、その後の調査成果についてパネルや出土遺物などをご紹介します。

小牧山城築城時、30歳であった若き信長が天下統一を睨んで手がけた居城づくりは、「信長の野望」をうかがわせます。

戦国時代に思いを馳せて、ご覧いただくと幸いです。



Komaki

主催：小牧市 小牧市教育委員会 小牧市施設活用協会

## 用語説明

- 石垣(いしがき)Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ**:小牧市では、上段石垣を石垣Ⅰ、下段石垣を石垣Ⅱ、三段目の石垣を石垣Ⅲと呼称。
- 古生層(こせいそう)**:古生代(今から約5億4,200万年前から約2億5,100万年前)の地層。
- 曲輪(くるわ)**:城の内外を土塁や堀などを用いて区切った区画の総称で、屋敷や蔵、やぐらなどが建てられた平地。
- 主郭(しゅかく)**:城の中核となる曲輪の名称。
- 永禄期(えいろくき)**:小牧山城が歴史の表舞台に出てくる期間のひとつで、ここでは織田信長が小牧山城に居城していた永禄6年(1563)から永禄10年(1567)までを指す。
- 天正期(てんしょうき)**:小牧山城が歴史の表舞台に出てくる期間のひとつで、ここでは織田信雄・徳川家康連合軍が「小牧・長久手の合戦」で小牧山城を陣城として利用した天正12年(1584)を指す。
- 遺構(いこう)**:昔の人が地面に残した跡。建物跡や溝、穴など。
- 遺物(いぶつ)**:昔の人が残した土器や石器などの動産的なもの(動かすことのできるもの)の総称。
- トレンチ**:遺構の有無を確認するための細長い発掘溝。トレンチによる試掘調査を行うことで、本格的な調査が必要となった場合、どの範囲まで調査すれば良いのかという判断材料になる。
- 土塁(どるい)**:敵などの侵入を防ぐため、土を盛って築いた堤防状の防御設備。
- 隅角(すみかど)**:屈曲部のこと。
- 裏込石(うらごめいし)**:栗石(ぐりいし)とも。排水や石垣の背面の土圧を調整し、石垣を崩れにくくするために石垣の背後に入れられた石・礫のこと。
- 斎藤氏(さいとうし)**:織田信長と同盟を結んでいた美濃の斎藤道三は、弘治2年(1556)に長良川の戦いで息子の義龍に討たれ、信長と斎藤氏の関係は険悪なものになる。永禄4年(1561)に義龍が急死し、嫡男・龍興が後を継ぐことになる。数度にわたり戦いを繰り返してきたが、永禄10年(1567)に、斎藤氏の居城である稲葉山城を信長に攻められ降伏し、事実上、滅亡した。
- 土師質土器(はじしつどき)**:古墳時代以降の素焼きの土器を土師器(はじき)といい、中世以降の土師器をそれ以前の素焼きの土器と区別して、とくに「土師質土器」と呼ぶ場合が多い。
- ロクロ成形皿(ろくろせいけいざら)**:ロクロを使って、作り上げた皿のこと。
- 鉄漿水(かねみず)**:お歯黒を施すのに必要な材料の一つで、鉄漿水と五倍子粉(ふしこ)を合わせることで黒く発色する。
- 土坑(どこう)**:発掘調査などで確認される遺構のうち、土を掘りくぼめてできたと考えられる、ある程度の大きさと深さを持った穴のこと。
- 腰巻石垣(こしまきいしがき)**:土塁の下部に築いた石垣のこと。
- 礎石(そせき)**:建造物の土台(礎)となって、柱などを支える石のこと。
- 大手(おおて)**:城の正面。また、正門。
- 搦手(からめて)**:城の裏門。
- 虎口(こぐち)**:中世以降の城郭における出入り口のこと。

参考文献  
 「グランド現代百科事典」1970年 発行所:株式会社 学習研究社  
 「広辞苑」1988年 編者:新村出 発行所:株式会社 岩波書店  
 「戦国武将・合戦事典」2005年 編者:峰岸純夫・片桐明彦 発行所:株式会社 吉川弘文館

平成28年度小牧市歴史館企画展  
**「織田信長が築いた 小牧山城の石垣 其の2」**

編集 小牧市教育委員会文化振興課文化財係 〒485-8650 愛知県小牧市堀の内三丁目1番地 TEL(0568)76-1189  
 小牧市施設活用協会 〒485-0822 愛知県小牧市大字上末2233番地2 TEL(0568)79-7715



## 戦国時代に雨水浸透枿? (Q区)

石垣Ⅱの前面(図1の→)で石柵状の石組を1基確認しました。石組は、地面が低く掘り込まれたところに石材が「コ」字状に設置されており、その内部に拳大の丸礫が敷き詰められています。(写真1)。

この石組は、石垣前面に流れる雨水などの水を一箇所に集めて地中に流して処理する、一種の「浸透枿」のような機能を果たしていた可能性があり、小牧山城では初めての確認例です。石垣を崩れないようにするためには水の処理は重要な課題です。信長が初めて築いた城で、あらかじめ石垣の排水処理機能を組み込んでいるということが判明したことは、大きな成果といえます。



写真1 石垣状遺構(石垣Ⅱ前面の赤枠)



写真2 土師質土器のロクロ成形皿出土状況

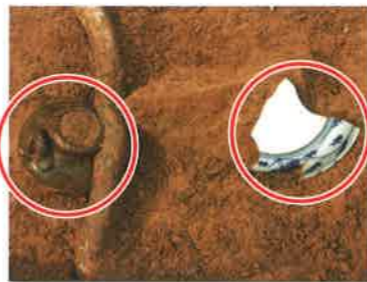


写真3 鉄釉水注(写真左)と輸入陶磁の染付反皿片(写真右)出土状況

## 主郭地区から遺物が出土!! (O区)

小牧山城では、遺物の出土は多くありませんが、O区で土師質土器のロクロ成形皿がまとまって出土しました(写真2)。

また、その付近で鉄釉水注(写真3の左)や輸入陶磁の染付反皿片(写真3の右)も出土しています。中でも鉄釉水注は内部には内容物があり、この内容物は、他遺跡の出土例などから鉄漿水ではないかと推定できます。

仮に鉄漿水の容器とその残留物であると考えた場合、その使用者は、戦国時代では一般的に未婚・既婚の貴人女性、または一部の戦国武将であるといわれています。

よって、男性あるいは女性の一定の身分にある人物が小牧山城主郭周辺に存在し、使用したという証拠になり得る重要な発見となりました。

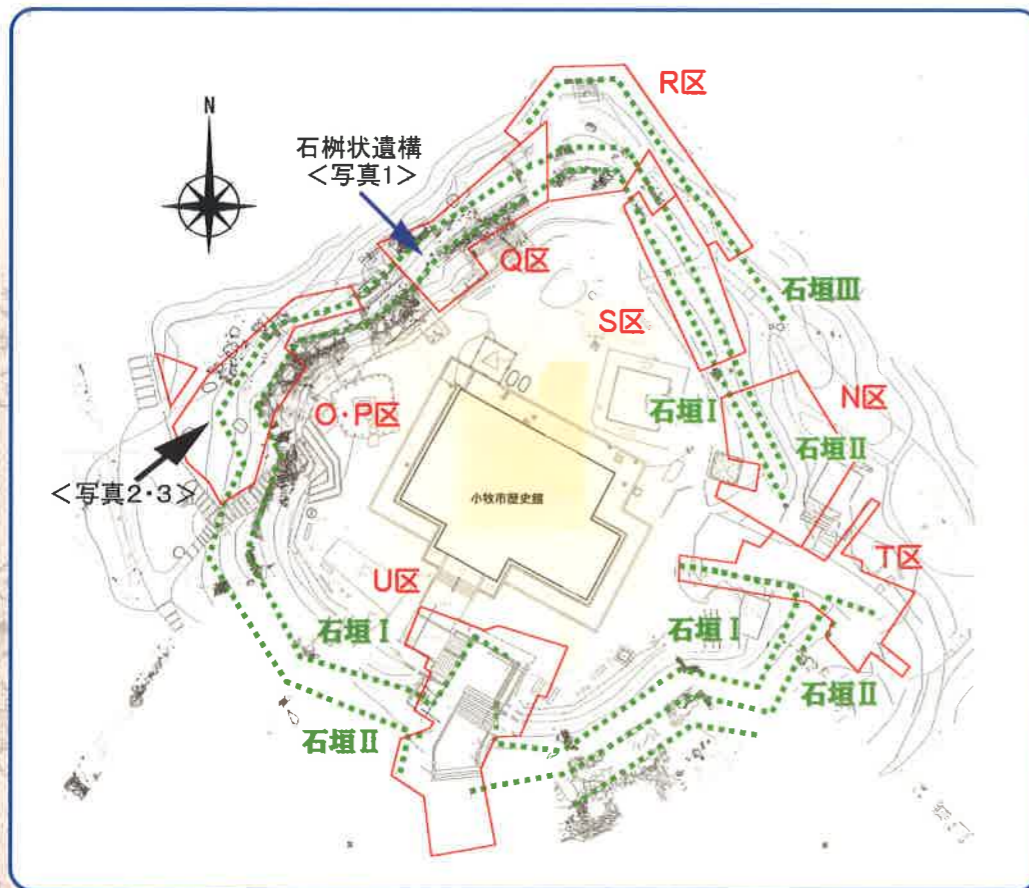


図1 調査位置図(平成25~27年度)

## 発見!! 大手虎口・搦手虎口!! (T・U区)

T・U区それぞれで確認した主郭に設けられた出入り口(虎口)は、「春日井郡小牧村古城絵図」(17世紀中頃)において大手道の表現がされていることや、使用された石垣石材の大きさなどから、南側が表口の手虎口(U区)、東側が裏口の搦手虎口(T区)と推定できます。それに伴うそれぞれの通路も「大手道」・「搦手道」と考えられます。

## 搦手門の礎石発見か!? (T区)

大手虎口(U区)と搦手虎口(T区)は、石垣Ⅰ・Ⅱの構造が似ていますが、搦手虎口の石垣Ⅰには石組み側溝(写真11)が一部伴い、また、礎石(写真12)が確認されたことから、門(搦手門)が建っていた可能性が強まりました。これにより謎のベールに包まれていた小牧山城の中心施設、構造物について迫る大きな一歩となりました。

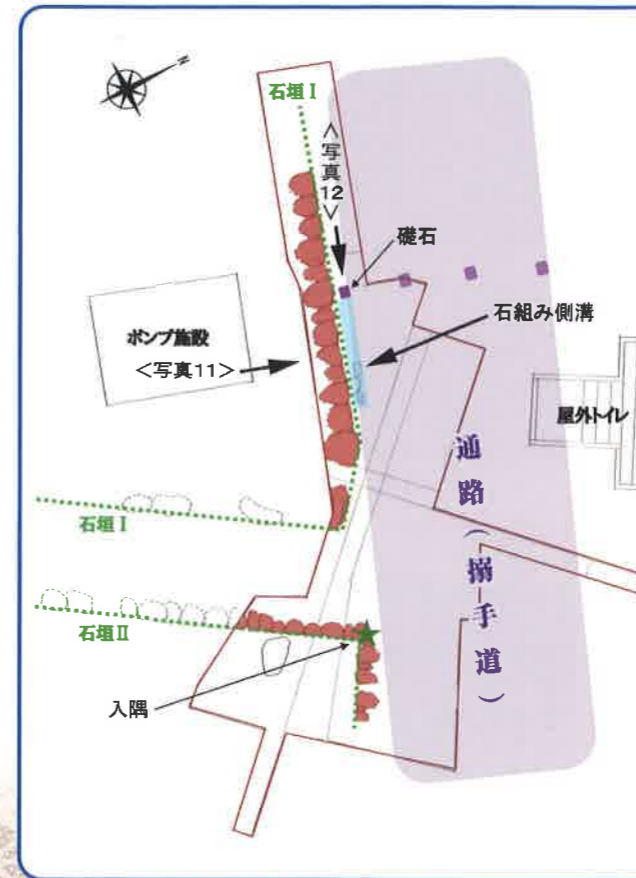


図4 T区 遺構模式図



図5 U区 遺構模式図

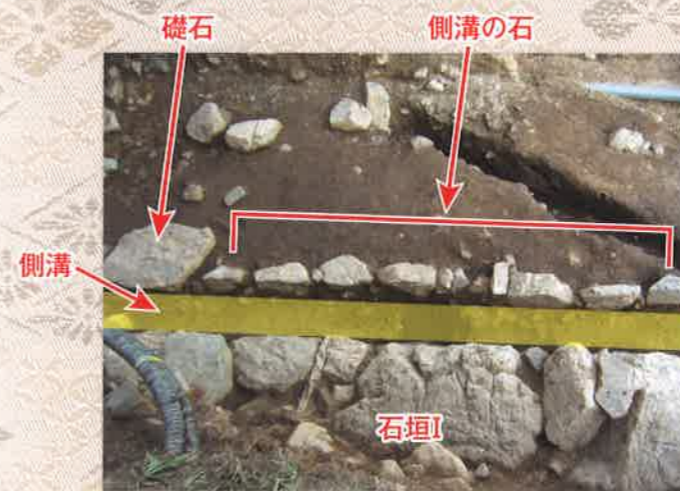


写真11 T区 石垣Ⅰ・礎石・石組み側溝



写真12 T区 礎石と常滑の甃(礎石の上)



### 三段目の石垣あらわる!

R・S区の調査により、石垣Ⅲは石垣Ⅰ・Ⅱとは異なる、「腰巻石垣」である可能性があり、土層状況から、石垣Ⅲ→石垣Ⅱ→石垣Ⅰの順に構築したと推測されます。また、石材の大きさもその順に大型化する傾向にあることから、石垣Ⅲは、石垣Ⅰ・Ⅱを築くための作業スペースとしての空間(曲輪051)を確保するための盛土造成に伴う擁壁として築かれた石垣と考えられます。

石垣Ⅲの石材は石垣Ⅱと同等もしくは小ぶりなもので30~50cm大のものが主体です(写真8・9)。使用している石材の多くは小牧山産出の自然石(堆積岩)です。小牧山以外から運んできた搬入石材である花崗岩の石材も含まれており、これまで一切確認されていなかった丸石の築石も確認しました(写真8)。

また、斜面を巡る石垣Ⅲのラインは、地形に合わせて上下に変化していることがわかりました(写真10)。

このように地盤の加工状況(地業)や造成状況を見ても計画的な設計意図をもって築城工事に臨んだことをうかがわせます。

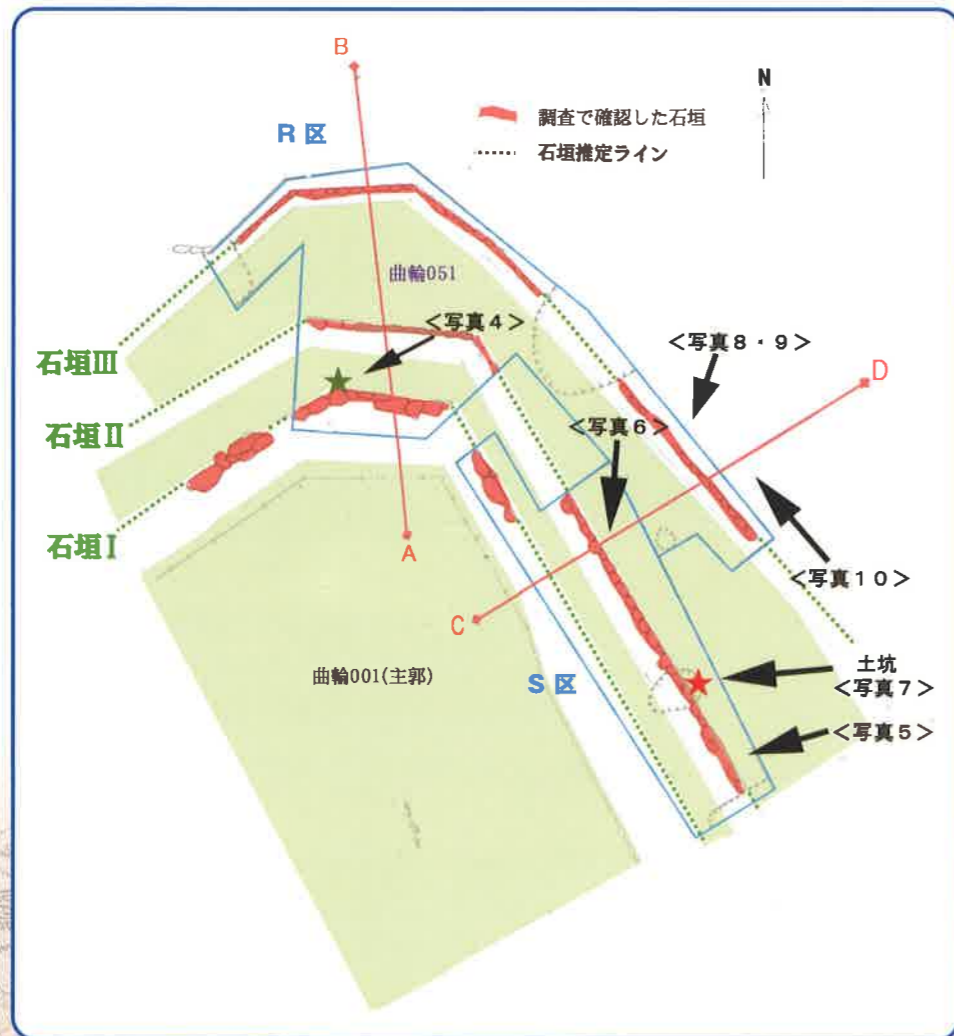


図2 R区・S区 遺構平面略測図

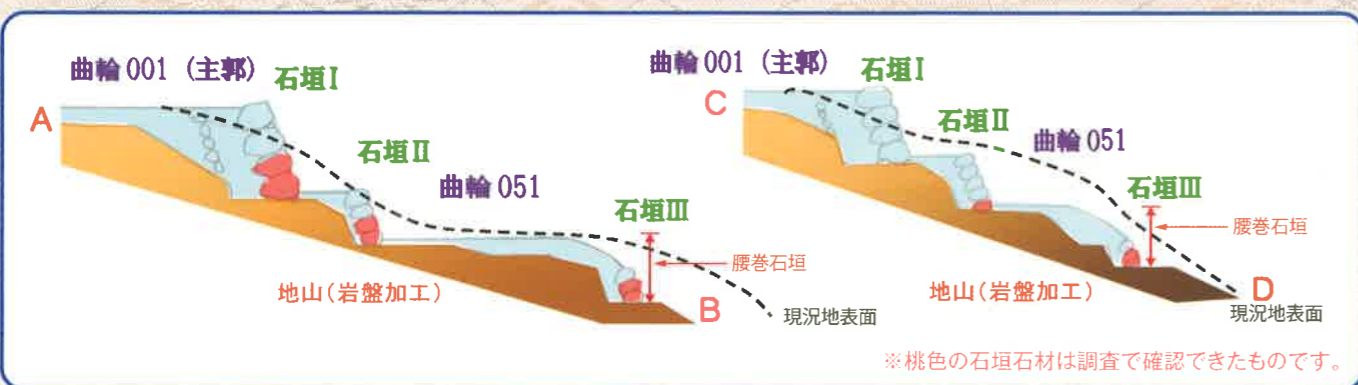


図3 R区・S区 石垣断面想定模式図



写真4 R区 出隅(石垣Ⅰ)



写真5 S区 石垣Ⅰの背面構造



写真6 S区 石垣Ⅰ・Ⅱ 掘りあがり



写真7 S区 土坑(石垣Ⅱ)



写真8 R区 石垣Ⅲ(近景)



写真9 R区 石垣Ⅲ



写真10 R区 石垣Ⅲ基底石ライン